

郷土誌だより

いまむら

特集・社寺と墓地

No. 7
編集委員会
今村誌編集委員会
発行
今村誌刊行会
瀬戸市平町3-142
電話(84)0840
コミュニティセンター内

八王寺神社と
医王山慶昌院

今から五百年程前、松原下総守
広長公がこの土地に城を構え、男
神五柱、女神三柱をむかえて八王
子社を建て、また、薬師如来をむ
かえて医王山八王寺を開創した。
これが八王子神社と慶昌院のはじ
まりと伝えられている。

広長公亡き後は、八王子社はご
典医だった矢野氏によって守られ
ていた。一方、八王寺は当時天台
宗に属し住職もなかったが、一六
三一(寛永八)年雲興寺一五世住
職興南義繁師が曹洞宗に帰入させ
たといわれるが、安藤政二郎氏の
瀬戸とどこごろ今昔はこれより
先、寛永五(一六二八)年孝岳慶
須が中興開基となつて寺号を慶昌
院と改め本尊を釈迦如来とした、
と記している。いずれにしろ以後
雲興寺の末寺として続いたものの
次第に衰退し元禄十一(一六九八)
年雲興寺十九世玄峰伝旨を迎えて
中興開山とするなどの曲折を経て
きた。

今村と広長公のつながりは連載
の「広長公物語」にゆずるとして
今村が以来昭和のはじめまで一村

一社・一寺であったことは広長公
との結びつきがそうさせたともい
えるのではあるまいか。また、隣
村の美濃之池の村社も八王子であ
ること、今村の大部分が慶昌院檀
家であることもこれを物語る。
瀬戸の発展と今村の都市化が進
んで寺院は次のように増加した。
各寺院の沿革由緒についてはここ
では割愛しやがて出版される本に
載せたいと思う。

- 真宗大谷派 光国寺 西吉田町
- 真宗六年移転完了
- 曹洞宗 弘誓寺(ぐせいじ) 東
吉田町、昭和一二年説教所から
昇格
- 真言宗醍醐派 覚城寺 追分町
- 昭和二年不動教会から昇格
- 浄土宗 善光寺 西吉田町 昭
和二三年説教所から昇格
- 日蓮正宗 天晴寺 東長根町
- 昭和四四年東印所町から移転

神仏分離と今村

今村文書には社寺関係の資料二
四点があり、お寺よりも神社関係
の記録が多い。

天照大神への尊崇を中心とする
我国個々の民間信仰が、仏教・儒
教等の外来思想に影響され理論化
されて「神道」が成立していく過

程の中でごく自然の成行きから、
神仏習合という姿が、本地垂迹と
共に現れたのは平安時代のことで
長い間、寺の住職が神社の管理を
兼務するという形のとりたてきた
所が多く、今村の場合も慶昌院の
住職が別当職としてお宮の守(も
り)をしていた。前項にもあるよ
うに慶昌院の起りはいわば八王子
社の神宮寺であり、その唯一の遺
構として明治の初期まで八王子社
の東隣りに薬師堂がたっていた。

幕末の慶応三年三月の神仏分離
令の公布、四月の達示で明治維新
への準備がなされ、明治初年、維
新政府の祭政一致の方針で神仏習
合は廃止となり、明治四年、八王
子社は慶昌院から直接村の管理へ
と移管され、薬師堂は明治一一年
慶昌院へ遷座、その跡地は八王子
社の神域となった。

八王子社郷倉にはこの頃の経緯
を物語るいくつかの資料が保存さ
れていたのである。

(かないしゃ) 西山神社(にしや
まのかみしゃ) 斉宮司社(さいぐ
うじしゃ)の三社が川西町と平町
一丁目にあり、地租改正の折に官
有地となったが、神仏分離令と共
に神社整理の方針がとられ一村一
社に合記するよう達示が出た。そ
こで、部落民の信仰の中心を失っ
ては一大事とばかり六社それぞれ
に祭神・由緒・維持管理状況等を
記し氏子総代、用掛、神官が連署
し第三区副戸長の添書もとつて県

令(後の知事)宛に、何とか残さ
せて下さいと神社据置願を出した
所「聞き届け難く候」と朱書して
返されたもの等級じてあるが、西
山神社だけは「書面聞届候事」と
ある。境内地九五〇坪社殿三尺×
三尺で六社中最も大きかったため
だろうか、村では他の五社につき
再願を、諏訪社については総代稲
垣善六、稲垣兼四郎、青山円七さ
らににより再三願を出したが許さ
れず、明治三九年四月と八月の勅
令で合記が更に推進され結局明治
四三年、三月二十九日に合併願を出
し同年五月十九日許可、これをう
けて六月一日に村社八王子社へ六
社とも合記し、六月九日付で「合
記御届」を提出して「一件落着」
となつたいきさつが読み取れる。

「村社据置願」という文書綴り
と「社寺現境内取調帳」をみると
当時(明・一〇)八王子社は村社
で他に無格社の東山神社(ひがし
やまのかみしゃ)諏訪社(すわし
ゃ)市杵島姫社(いちきしまひめ
しゃ)の三社が市場町に、金井社

墓地の変遷

明治のはじめに第三大区第十五小区東春日井郡今村の戸長から提出された「墓地取調書」の控が今村文書の中にある。恐らく地租改正にからむ調査の控えであろうがこれによると、

一、福井墓地(現南山町一丁目)
現反別二反一畝一二歩

これは現在の通り墓地として掘置きたい。

二、上の山墓地(お寺の上の山)

現反別二反八畝一四歩

これも(一)同様掘置きたい。

三、寺墓地(現境内墓地の一部)

これは尾張藩時代の上納山(じょうのうやま)で当時墓地であつて古い石塔が今も並んでいるからこのまま墓地にしておきたい。

と記されている。この三ヶ所は明治初年の地籍図にも墓地と明記されているが(三)の寺墓地の所は山林と同じ緑色に塗られている。

この古木に囲まれ陽も当らぬ林の中の墓石は昔に覆われていたが昭和三四年の伊勢湾台風で杉の大木の多くが倒れてしまい、古い墓石は何百年ぶりかで白日のもとに

さらされることになった。

昔は土葬だったから、故人の遺体は人里離れた所に深く埋め、その上に盛土をして墳墓としたが、これを埋葬のための墓、即ち「埋め墓」とし、墓参の便宜のために別に霊を迎え、お詣りするための墓つまり「参り墓」を作っておく、いわゆる両墓制というのが本州中央部に多く見られるが、この参り墓の多くはその場所を寺の境内に求め、埋め墓の盛土に対しこちら

は石塔を建てて墓標とした。前述の(三)寺墓地というのは、この両墓制の「参り墓」ではないかと思われるが、どうだろうか。はじめ各家が二つの墓を持っていたのが、次第に用地が得られなくなり、一ヶ所にして埋葬地点を少しづつずらしていき、その上に墓標を立ててお参りもする「単墓制」へと移行していったのではないか。各家の墓地の持分は一坪くらいだったようである。そして、川南の集落は上の山墓地を、川の北の集落は福井墓地を使っていたが、昭和に入つて吉田墓地(現保健所あたり)が新しくできた。

太古以来長く続いた土葬はしだいに火葬にとつてかわり、昭和二年四月一日からは、土葬は完全

に姿を消すことになった。

この頃から庶民の墓も次第に立派なものになり、周りに柵をめぐらしたりコンクリートで境界を区切つたりした墓地にピカピカに磨いた石碑が建てられたりするようになったが、総体的に墓参の頻度は少なくなつてきたようである。

墓地の理想

公園墓地

前号に書かれた西部区画整理事業が昭和三四年からはじまると、地内にある福井墓地の取扱いを考

えねばならなくなつた。先進地の視察にも出かけたりして、将来の墓地のあり方をさぐつた結果を写真にまとめ、川西・北脇の島寄り合いが開かれたが、すんなりとは運ばなかつた。最初の青写真

は、墓地を整理して中央に慶昌院の分院を新築しその周囲を墓地とし環境を整えようというものでつた。この計画案は、川南の市場や寺山の島に伝わり、また寺総代会の課題にもなつて、地区内に墓地委員会が組織され住民は墓地と取り組んだ。やがて墓地というより納骨堂の新築が中心になつたが、年輩者は、どうしても墓をなくす

ることは賛成できないという反対意見で、三ヶ所の墓地は廃止して一戸一碑、一平方メートルの一区画で新墓地をつくる。納骨堂も新築する案が最終案として実行に移され、今見る慶昌院境内墓地に、一六〇〇基、納骨堂には二三〇〇余の納骨室が二階に設けられ、一階は葬祭場に利用する広間がつくられた。永平寺管首の銘名で白雲堂と呼ばれるようになった。

なお、三ヶ所の墓地にあつた石碑は一戸一基を新墓に移すことになつたので、移すことのできない墓石三〇〇〇余基を集めて「万霊塔」をつくり供養した。

この仕事は確かに大事業だつた。これを推進された人々の苦労は、紙面の都合で割愛し、本の方で伝えることにしたいと思う。

瀬戸市の市街化区域の一面に、緑あふれる環境づくりと、社寺境内の整備の基をつくつた先人と先輩に今さらながら感謝の念を禁じ得ない。

お墓の世界記録

ここでちょっと気分を変えて、てっかいお話をひとつ……。

日本人の祖先崇拜思想はきわめ

て厚く、その証拠に、お墓に關しては世界一の記録をいくつか持っています。

まず、世界で最も沢山の人がまつられていた墓地は高野山です。宮様將軍武士町人の墓から誰のものかさだかでない墓まで含めると実に百万基をこえる墓石がひしめいています。中には白蟻の墓なんてのもありますね。世界中どこを訪ねても、先ずこれだけ沢山の墓が集っている所はないそうです

が、それでは墓地の広いことでの世界一はというと、これも日本にあります。ご存知の方もあるかと思いますが富士山のふもとに約百万坪の敷地を有する富士霊園がそれです。慶昌院のお墓の団地がケシ粒に見えまゝ、というわけ。

さてそれでは、個人のお墓で世界最大はというと、最近中国でもいろいろ発掘されていますのでやがて王座を奪われるかも知れませんが、堺市にある仁徳天皇陵が世界一でしょう。四六万平方メートルに高さ三三米、前後径四七八米前方幅三百米の前方後円墳が三重の濠にかこまれて鎮座している。

もっとも、墓そのものの広さという点ではインドのタジ・マハールには及ばないそうですが……。

社寺の維持管理

古い時代、神社には神田、寺には寺田(神領・寺領)が与えられていて、そこから社殿や堂塔の造営、修理等の費用を生みだすようになっていた。そして、どちらかといえば社領より寺領の方が重んじられていたようである。しかもその上に寺には祠堂金(しどうきん)といわれる寄付があつた他、死者の冥福を祈るために、寺には金銭や田畑が寄進されることもあつた。

こうした、長い歴史をもつ寺社の領の取扱いは明治の維新政府にとつて大きな課題の一つとなつたが明治十六年頃までにはどうやら片付いた。その結果、先写にも記したように、寺社領は境内地を調べた上であいまいな土地は官有地として召し上げられてしまった。

えることが出来た。それというのも、八王子社も慶昌院も共に松原広長公の創建になるものであり、慶昌院は檀家をもつていた。そしてその檀家たるや八王子社の氏子でもあり広長公の徳の及ぶ家々で占められていたからであろう。

今村文書の中に、「旭村大字今区規則」大正四年一月一日より施行」というのがある。全文一〇六ヶ条から成つてゐるが、そのうちで社寺に関する条文は二五ヶ条もあつて最も大きな章をなしており今村びとの信仰心の厚さを物語つてゐる。それを見ると、

〇氏子、檀方総代は共に四名づつで、任期は氏子総氏が五年、檀方総代は三年、何れも区の組織から推せんて選出される。

〇社寺共に重要事項に關しては、区長と計りこれが実施をなす。となつていて全く同等に扱つてゐることがわかる。

もう一つ、大正一三年七月の記録に社寺屋根替小麦壹徴収名簿というのがある。

時の区長は青山嘉左エ門さんで区評議員会により、小麦壹は一戸当り四貫目、現金なら四〇銭を徴収することが定められ、集つた結果が戸別に記入されている。これを

を集計してみると、

寺山島五八戸、市場島四六戸、追分島七一戸、北脇島三八戸、川西島七〇戸、合計二八三戸

また、戦後の農地改革(前身に記載)では、社寺共に大きな損害をうけたが、特に慶昌院の方が大きかつた。祠堂金として寄進された田畑があつて、いわば「地主寺院」だつたが、自作農をつくることが目的の改革であるから、それらは否応なく買収される破目になつたのである。

瀬戸市農地委員会が取扱つた四町三反余歩のなかで、慶昌院の分が三五筆、二町一反八畝余歩もあつて全市の社寺関係買収地のほぼ半分を占めてゐる。これに対し八王子神社地は一件、八畝一九歩であつた。こうした措置の結果一般的に寺院は経営難となり、いわゆる「兼業住職」が生れてきた。例えば教師になる、保育園を経営する、或は寺を観光資源として公開する、等の類である。

昭和二六年には宗教法人法が公布され、八王子神社も慶昌院も宗教法人となつた。県内の連合団体ではそれぞれに準則による規則を設けているが、慶昌院では三五年

十月、総代会により更に詳しい「慶昌院運営規定」が作られ、檀信徒はすべて護持会員となり一定の会費を負担することなどを決めてゐるし、八王子神社の方は四六年に奉賛会が組織され、その運営に當つてゐるのが現在の姿である。

民間信仰と俗信

お天王さま 津島神社(祭神スサノオノミコト)の分身を部落ごとノ道端に祀つたもので、辻天王ともいふ、寺山・市場・北脇・川西等、各島の代表者が毎年津島神社へ参詣し大麻を迎えて来て祀るもので、昔は六月五日から各家ごとに赤提灯を点してお天王さまにお詣りする。これを十五日まで続けると天然痘や伝染病にかからないと信じられていたという。

お庚申さま 六十日ごとに巡つてくる庚申(かのえさる)の日に、信者が集つて庚申様の樹図(帝釈天・青面金剛・三猿などの図)や庚申塔をまつり、夜を徹して酒食を共にしながら語り合う。これは庚申の日の夜ふけ、人間の体内に住むという三戸の虫(上戸、中戸、下戸の三匹)が、その人の睡眠中に体からぬけ出して天帝にその人の罪科を報告するので生命にかかわると信じられていて、睡らないために酒盛りをして夜を明かす。

おんか祭り お銀祭り(本紙二号に紹介)と同様、稻の害虫を防ぎ豊作を祈願する行事で、青竹の先にワラ人形(斎藤実盛をかたどつたものという)をつけ、天下泰平五穀豊穡と書いた紙轍を押し立て鉦や太鼓で喋しながら村の西端から東端まで田道をめぐる。

お天遣むかえ 彼岸の中日にまず日の出を拝み、弁当を持って三々五々東の方へ向つてどこまでも歩き、太陽が真南へ来た頃、弁当を食べて今度は西を向いて日没までお日様を送つて歩くという、長閑な太陽信仰の風習が大正の頃まで老人たちの間で行われていた。

甘茶の功德 四月八日の花まつりの日、慶昌院では甘茶の接待をする慣わしが現在も続いている。

この甘茶で墨をすれば書が上達するといふ俗信は広く知られてゐるが、この地方では甘茶ですつた墨で短冊に「千早振る卯月八日は吉日ぞかみさげ虫を成敗ぞする」と書き戸口の柱に逆さに貼つておくと毒虫や蛇の侵入を防ぐまじないとされ、甘茶で眼を洗うと眼病が治るとも信じられていた。

〔連載〕

広長公物語 (7)

(二) その夜 (3)

―野宴―

近江番場の宿に、一向俊聖が開いた時宗一向派の本山、八葉山蓮華寺(註)がある。仁良は修業僧として、寺主俊華上人に帰仰していた。美濃の国、近江との国境近くに青坂山妙応寺という古刹がある。その妙応寺の辺り一帯に長江氏の本拠今須城があった。長江氏は一時美濃国守護代を務める程の勢力があったが応仁二年(一四六七年、当時より十年前)秋、斉藤妙椿に攻められて潰滅し、四散隠遁した。広長公と戦った永井(改性)民部少輔もその時四散した一人である。(是等の事情は後述)

その様な関係があつて、近頃唯ならぬ風聞が仁良の耳に入らぬ訳はなかつた。

今村に血のつながる仁良としては黙視出来ず、急遽帰郷して昨夕赤津万徳寺に止宿したのである。

そして今夕盛重殿とねんごろに広長公の葬送をすませて美濃之池に來た。お鶴の方は、櫛に乱れた

黒髪を流して端坐する。同座の中にあつて仁良は左手に持った念珠をつまぐり十念を唱える。「一念弥陀仏 即滅無量罪 現受無比業 後生清浄土 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」……静かにお方の前に膝を進めた仁良「お方のご心中お察し申す。今はお心を静めて御仏の御名を唱え、殿の御菩提を弔い給いて、生がお交りになつたその時は、六道四生の間には必ず一つの道に向かわれましょう、乳母様の仰せの様に二人の御子を守らせ給え」その言葉の終るや否や、

「お兄さまあー」
お鶴の方は仁良の膝に……。
生きる術を失いかけた今、総てをこの兄に任せて生きようと心は躍動した。母には四つ時に生死を別たれ、労さいに呻吟する父横山の殿も、広長公に嫁がせて一年足らずしてこの世を去つた。直の兄は幼弱で早世して了つた今、此の仁良一人が血をわけた唯一の人というわけ。仁良は静かに妹を庇い乍ら「のう、お鶴、上人様はいつも云つて居られる、死んだ人間はみんな天国に昇つて星になつるとるんじやよ、生きて居る人間が死者を思い出すたんびに星は輝くんじやよ、その星が光れば光る程

死んだ者はしあわせになれるんじやよ」と。なあお鶴赤津へ行け、万徳寺の円林上人様にお方の事は良く頼んでおいた。殿は万徳寺で待つておいでだ」

お鶴の方の血が騒ぐ、しかしこれが今村との別れになるかも知れぬと思つたお方は「主膳どの、もう一度殿がお祭りなさつた八王子の神にお別れをしたい」と、やがてお鶴の方は八王子の神前に額づいて今の生を謝す。そして東方の薬師堂に手を合わせ二人の児を守らせ給えと、現世利益の称名を念じ終つて赤津へ向つた。

思い知る身も己の夢、唯散る花の影を見るお鶴の方、憐れみの露を踏んで東に足を運ぶ。今は二世、三世の安穩を念じたら親と子の道を夢中に歩む。その心は兄仁良の解く仏心に通じていた。勿論数人の者が前後に身を護つた。

西に傾く月の光に一行の影も長く、田に入る水音、こ彼処の蛙も哀別の情に響く、今村を後に美濃之池を離れようとしたその頃、がさがさ、ごそごそ、と草むらがゆらぐ。一行は顔見合わせた。はつとしたお鶴の方は侍女の背に在る我子のもとにかけ寄つた。前から後から左右からも、草をかき分

けて頬かむりの男、鉢巻きの男、太つた女、目をきよろつとしたやせた黒い面、面、面が月の光をうけて微かに白い。亡魂の様にお鶴の方の行方を阻んだ。その時蛙の様にお方の前に両手をつけて頬かむりを解く「お方さまあ、暫しのお別れじやなも、お体をいとおくれよ、大事になあ」百姓甚兵衛は右腕に涙を拭つた。どこでどう連絡がついたのか、今村百姓衆の一同であつた。弥十、彦八、平助、由蔵、源助、おこうも、とめも、はるも……夫々に顔を上げて手にしたものの、あかぎ、百合、菱、芋の葉の煮たもの、くるみ、銀杏、むかごの炒つたもの、どじょう、たにしの焼いたもの、粟と麦でこねた団子等、竹筒の白酒を注ぐ者。しばしの別れを惜しむ哀は美濃之池の草むらで行われた。

時は移る。野宴もそこそこに、傾く月の光を背に、お鶴の方は多助の笛の音に送られて赤津へ向つた。その時、振り返る一行は長い尾を引いて乾に飛ぶ流星を見た。広長公の亡魂がミサイルとなつて今須に落ちたのか、始祖の里、近江国大山郡松原村か、或は樹令千四百年という根尾谷の淡墨桜の開く今村の里か。何れにしてもここ今

村を中心に、東に西に松原、青山、横山、矢野、稻垣、鈴木、藤井、中島、伊藤、川島等を名乗る姓は昭和の今日迄続いている。(二)完

◎註 寺の縁起に依ると当山は千三百年昔、聖徳太子の創建で法隆寺の如き七堂伽藍の完備も運治二年の雷火で焼失し弘安七一年一向上人の錫が留つて開山に仰ぐ、昭和十七年浄土宗本山に列す。又南北朝の古戦場として六波羅探提北条仲時以下四三二人が切腹、太平記は「血は其身を浸して恰黄河の流れの如く」と。三代同阿上人の手になる過去帳は重文となつて今に残る。尚、文豪長谷川伸「暇の母」の主人公番場の忠太郎地蔵が併優芸能人らの奉財によつて造立されて居る。歌人斎藤茂吉も松風の音聞くときは古の聖の如くわれは寂しむと歌碑に残している。(白水郎)

資料ご提供・ご助言深謝(敬称略)

○深川神社・二宮宮司・感応寺梶田住職・慶昌院・光國寺・善光寺・覚城寺・天晴寺・弘誓寺

○伊藤進・三宅寛一・稻垣芳生・阿部隆士・横山充・横山春一・青山佐太郎・稻垣悟・青山達雄・加藤つき・青山富一・青山政信